

Title	昭和四十八年度大会記事 ; 昭和四十八年度の活動状況(東洋史専攻) ; 国史専攻修士論文 ; 国史専攻卒業論文 ; 東洋史専攻卒業論文題目 ; 東洋史専攻修士卒業論文題目 ; 西洋史専攻卒業論文 ; 西洋史専攻修士論文 ; 通信課程
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1974
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.1 (1974. 6) ,p.109- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19740600-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

昭和四十八年度大会記事

昭和四十八年度の三田史学会大会は、四十八年十月二〇日(土)三田校舎においておこなわれた。午後一時、国史、東洋史、西洋史の三部会にわかれ、それぞれ四名づゝ、計十二名の研究発表があり、それに引つき、訪問教授として来塾中の釜山大学校教授金廷鶴氏の公開講演がおこなわれた。

〔研究発表〕

国史部会 一〇二番教室

石田家文書の性格について —— 主として武田氏と小田氏の関係 ——

大学院学生 糸賀茂男氏
大学院学生 舟越香郎氏

北海道における町村制の成立と研究の課題

北海道行政資料課 鈴江英一氏
鶴岡社領武藏國

室町時代東国における村落と結衆 —— 佐々目郷を中心にして ——

宇都宮大学 峰岸純夫氏

東洋史部会 一〇三番教室

水稻耕作の導入と頭目制の変動 —— 台湾アミ族の場合 ——

大学院学生 濑良重夫氏
大学院学生 柳井由美子氏

穆天子伝の成立について

彙報

ヴェトナムの宦官について 大学院学生 和田正彦氏
カザン汗のイクター授与勅許状について 大学院学生 坂本勉氏

西洋史部会 一〇四番教室

バシリウスのヘクサエメロンに於ける愛について

大学院学生 森下晶子氏
田中萃一郎の「史学研究法」ノートについて

大学院学生 佐藤正幸氏
ベダの歴史資料について 竹内謙太郎氏

フランス絶対王政期の社会構成 —— ムーニエ教授の見解

をめぐって ——

北海道教育大学 宮崎洋氏

〔公開講演〕 西校舎五二六番教室

土師器と須恵器の起源について 釜山大学校教授 金廷鶴氏

〔総会〕

午後五時開会、まず米田委員より会務報告、高橋委員より経理報告があり、それぞれ承認され、ついで会則改正案が提出され、河北委員より趣旨説明があり、出席者多数で承認され、直ちに施行された。新会則は次の通りである。

会則改正案

第一条 本会は三田史学会と称する。

第二条 本会の事務所は東京都港区三田二十一五一四五 慶應義塾大学文学部史学研究室に置く。

第三条 本会は歴史学に関する研究をおこなうことを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。

1. 機関誌 史学の刊行

2. 大会、研究会の開催

3. その他、本会の目的達成に必要な事業

第五条 本会の趣旨に賛同し、所定の会費を納めたものを会員とする。（会費は別にこれを定める）会員は普通会員、名譽会員とする。

第六条 会員は史学の配布をうけ、大会及び研究会等に出席することが出来る。

第七条 本会に次の役員を置く。

1. 会長 一名 2. 委員 若干名 うち十名以内を常任委員とする。 3. 監事 二名

第八条 委員は会員より選び、会長は委員の互選により、常任委員及び監事は会長が委嘱する。

第九条 役員の任期は二年とする。但し重任を妨げない。

第十一条 大会の議事は出席会員の過半数をもって決定する。

第十二条 本会則の変更は大会における出席会員の三分の一以上

の賛成を得ておこなう。

今回改正された主な点は、会員中より委員若干名を選び、委員

会において、学会運営方針の決定などをおこなうことと、互選により会長を、また会長の委嘱する常任委員（委員中から）によって日常の会務遂行がおこなわれること、および会計監査をおこなう監事を新設したことなどである。

つゞいて新会則にのつとて委員の選出に入り、左記三〇名の諸氏が選出され、満場一致承認された。（五〇音順）

会田倉吉、伊藤清司、岩谷十二郎、江坂輝彌、小川伸之、小川英雄、尾崎康、大沢一雄、可児弘明、黒田寿郎、坂口昂吉、清水潤三、志水正司、高瀬弘一郎、高橋正彦、高橋碩一、田中荆三、近森正、東畑隆介、中井信彦、平山栄一、本郷広太郎、牧野信也、三橋富治男、峰岸純夫、宮崎洋、森岡敬一郎、山田忠雄、米田治、和田博徳

伊藤座長の提案通り、総会終了後、新委員による第一回の委員会を開催して、会長の選出と常任委員、監事の人選をおこない、その人選の結果を、後刻開かれる懇親会の席上発表することが承認された。

第一回委員会において互選された役員（任期二年）は次の通りである。

会長 中井 信彦
常任委員 清水 潤三

森岡敬一郎

江坂 輝彌（編集担当）

高橋 正彦（経理担当）

東畑 隆介（学会担当）

可児 弘明（庶務担当）

西岡 秀雄

山口 清重

昭和四十八年度の活動状況（東洋史専攻）

昭和四十八年六月八日（地人会、於三田研究室）

伊藤清司 「蓬萊島と“魚の島”——馬王堆一号漢墓出土の

帛画について——」

昭和四十八年六月三十日（大学院研究会、於五四一教室）

瀬良重夫 「台灣アミ族の焼畑耕作から水稻耕作への転換過程

——頭目制との関連性——」

李柏如 「左伝について」

昭和四十八年七月七日（大学院研究会、於一三四教室）

増子暁美 「ハワーリジュ派の思想とその起源」

大村陽子 「一五六九年のアストラハン遠征と十六世紀後半の

露地関係」

山本英史 「清初遷界令の成立事情について——鄭氏政権構

造とその社会の分析——」

昭和四十八年十月六日（折口信夫記念講演「古代学」、三田）

松本信広 「伝説の系譜」

昭和四十八年十一月十日（修士論文中間発表会、二二一番教室）
昭和四十八年十一月十九日（新入生歓迎会、西校舎會議室、出席者二三名）
昭和四十八年十一月二十九日（小泉信三記念講座「人類と文化」日吉二二教室）

可児弘明「第三世界と華僑、日僑」

昭和四十八年十二月六・七日（東洋史談話会旅行）
西丹沢中川温泉、参加者二六名

昭和四十八年十二月十八日（大学院研究会、於五一六番）
稻葉信正 「マキシム・ロダンソンの『ムスリム商人』を読んで」

三条彰久 「米沢興譲館旧蔵鈔本『冲虚至徳真経列子』調査報告」

浅井紀 「清代の賦役改革について」
終了後、三田・洗濯船において前嶋信次先生をかこむ夕食会を行ふ。

昭和四十九年二月八日（地人会、三田研究室）

伊藤清司 「レンネル島調査報告」

昭和四十九年二月十六日（大学院研究会、史学共通研究室）

浅井紀 「中国を訪問して」八ミリ映画上映

終了後、東洋史談話会の卒業生送別会を三田・クボールで行う。出席三五名。

○第六四回西洋史学会例会（昭四八・五・十五、於史学共同研究室）発表者及び発表題目

小川英雄『ヒクリスとパレスチナ』

東畑隆介「F・C・ダールマンの政治思想」

○六五回西洋史学会例会（昭四八・十二・二〇、於共同研究室）

発表者及び発表題目

石田恵子「クレイステネスの改革に関する一考察」

田辺三千広「イヴァン三世の教会政策」

国史専攻修士論文

糸賀 茂男 古代末期東國の在地構造

——将門の乱再検討のための視角——

吉川由紀子 皇親政治の歴史的位置——皇親制への疑問——

小宮 孟 士浦市上高津貝塚採集の魚貝類遺存体について

酒井 孝幸 幸徳秋水の思想

小山 騰 国民主義の萌芽——渡辺華山の思想史的研究——

国史専攻卒業論文

本田 茂子 弥生時代の有溝集落

高杉 博章 擦文文化形成の背景

石田 秀雄 下総台地に於ける 浮島阿玉台系文化

古河 知行 弥生時代の環濠集落をめぐって

清水 久嗣 倭漢史の研究

——その渡来説話と氏構造について——
内田 亮子 「記紀」伝承の史実性について
——崇神王朝から応神王朝へ——

三宅 和朗 天岩戸神話成立に関する一考察
佐々木長世 古代国家形成過程についての一考察

——王朝交替論を中心として——
永野美智子 額田王
佐々木幾久香 壬申の乱
野口 泰寛 薬師寺論争考

林 和美 行基

藤田 啓子 藤原仲麻呂政權——紫微中台と中衛府を中心にして

大口 保江 吉備真備

伊藤由紀子 古代歌謡論

深見 美文 源氏物語について

坂本恵里子 能楽——その源流——

柏木 園子 侘び茶の形成

中川恵美子 天の岩戸神話の鎮魂祭的性格

宮尾 明美 源氏物語における出家とその動機の問題

福島麻美子 宇佐八幡に関して

——その中央進出過程を通しての一考察——
荒井 晴夫 伊勢神宮における庄園制的対応について

古北 秀子 北条政子について

高橋 悅子 得宗專制政権の構造について

- 藤田千鶴子 中世における乳母制度とその発展について
- 渋谷 由美 御成敗式目及び追加法と幕府権力
- 石井希和子 世阿弥同朋説について
- 益田 潔 鎌倉幕府不動産訴訟法について
- 大越 和子 島津庄について
- 中島 晴健 政略結婚と戦国女性
- 名和 勘二 本能寺の変について
- 能美 良也 親鸞に関する一考察
- 稻田みちる 後期江戸における庶民生活の一考察
- 牧野かおる 松陰の思想転換
- 網崎 修 安政五年の条約勅許問題
- 井口 淑子 キリストンと茶道との関係について
- 上総 英司 江戸幕府のキリストン取締り政策と背教者
- 長嶺 京子 不干齋ファビアンの基督教原因をめぐって
- 西村佐和子 キリストン教会の邦人問題
- 曾我マリ子 ウィリアム・アダムスと英國商館との関係について
- 寺山 千晶 日本布教をめぐるイエズス会と托鉢修道会の抗争
- 渋谷 徹男 本居宣長の「ものがあわれ」について
- 佐川 敦子 町与力の反抗——大塩平八郎の場合——
- 是永 幹夫 慶念「朝鮮日々記」について
- 寺田 伸子 千家流家元制度の確立とその存続
- 沢崎 隆 日本資本主義論争と帝国主義段階論
- 大須賀淑郎 越後の質地騒動について

- 宇都宮洋子 天保改革における遊里、芝居小屋への弾圧
- 松本 久子 近世における下関の発達とその経済的意義
- 大北 孝子 佐渡奉行川路聖謨考
- 榎本 理一 本居宣長・その国学思想
- 小林 俊太 三宅雪嶺・その国粹主義
- 沢田 澄子 対外政策と日本町——呂宋日本町——
- 富永 信保 大逆事件研究序説
- 浜森 秀樹 武家に関する一考察——武家の社会史——
- 宮前 幸 堺の会合衆と「都市の自由」
- 東洋史専攻卒業論文題目
- 武者 章 殷の王族に於ける子の位置
- 小見山春生 陳勝の乱に関する若干の考察
- 秦漢代の人的結合組織を中心として——
- 藤井 俊明 前漢に於ける内朝と外戚
- 深谷 和江 均田制にあらわれた社会政策
- 会沢 圭子 三元里事件について
- 小野 知多 太平天国の天京における女館制度
- 鳴海 孝司 日清戦争外債の中国経済に与えた影響
- 今西 直史 康有為の「進歩」性と変法運動の一問題点
- 田尻 孝二 孫文の連俄容共の本旨について
- 川島 純子 犯罪と刑罰にみた中国女性の地位の歴史的考察

- | | | | |
|-------|--|-------|---|
| 佐藤 元 | インドシナ共産党の成立 | 前田 煉子 | 明末天啓年間山東省における宗教的農民叛乱について——徐鴻儒の乱を中心として—— |
| 白鳥 晶子 | インドに於ける伽藍の変遷——タキシラ、ナーガール、ジュナコンダ石窟寺院を比較して—— | 村上 順子 | 西南中國の少数民族にみられる創世神話 |
| 廣瀬美代子 | オスマン帝国のドイツ・プロテスタント諸侯に及ぼした影響——一五二一年ベオグラード攻略から一五三二年ギュンス包囲までの考察—— | 和田 正彦 | ヴェトナムの宦官について |
| 阿部 寛子 | 諸官職よりみたシャー・イスマーイールの沿革 | 陳 有容 | ベトナムに於ける伝統的女性の地位 |
| 坂井 礼子 | 米国における東洋人社会の歴史的構造 | 小林 雄三 | 黎帝と鄭王の関係について |
| 新井 国貴 | 有段石斧の研究 | 神保 長文 | アッバース朝時代中期のクム地方に於ける租税徵収について |
| 谷本由紀夫 | 蠶民の起源について | 志田 信子 | Ibn Khaldūn の al-Mugaddimah について |
| 志茂 芳充 | 朝鮮巫歌に現われた来世觀 | 羽田 信 | 西伯利亚入墨考 |
| 松原 英俊 | 鷹狩の名鷹について | | |
| 森 政広 | アイヌ巫女論——レビ・ストローネスの方法—— | | |
| 那波 市郎 | 十四・五世紀の先島 | | |
| | 東洋史専攻修士卒業論文題目 | | |
| | ——中国・朝鮮の二史料を中心として—— | | |
| | 西洋史専攻卒業論文 | | |
| | 東畠担当 | | |
| 峯田 諭一 | 蚩尤考 | 雁田 充範 | ドイツ社会民主党における『修正主義論争』の実態 |
| 安倍 道子 | 春秋・戦国時代の楚の巫俗について | 松下 典子 | 日系人——その移民と発展の歴史—— |
| 柳井由美子 | 穆天子伝の成立 | 森谷るみ子 | ロバート・オーエンと彼の社会思想 |
| 三条 彰久 | 列子の成立に関する一考察
——天瑞篇、説符篇を中心に—— | 中島 礼子 | 名誉革命前後のイギリス議会と国王の政策 |
| 長谷川誠夫 | 宋代官箴にあらわれる胥吏について | 中山由紀子 | イギリス婦人参政権運動 |
| | | 杉浦佐戸美 | ナチスドイツの反ユダヤ政策 |
| | | 田崎真知子 | ドレフュス事件
——ゾラ及び『私は弾詰する』が果した役割—— |

- 原 定理 英国の対仏戦争（一七九三—一八一五）とその社会・経済的影響について
- 柵木 康子 英国における社会保障制度確立への歴史的過程
- 竹井 次男 十八世紀における英國貴族
- 野沢美恵子 スペイン絶対王政確立に至る基礎課程及びスペインの特殊性との関連について
- 夏目 誠 アメリカ帝国主義の特質について
- 上坂 樹 オルテガとスペイン問題
- 小城 和朗 フランス右翼運動についての一考察
- 久次米義敬 L'Affaire Dreyfus
- 増田 逸雄 省和政策に関する一考察
- 諸井こずえ ドレフュス事件について
- 原島まき子 レヴィ・ストロースとエリアーデの神話研究について
- 久野由利子 古代エジプト人の来世観
- 松本 妙子 オシリス神の起源と性格
- 酒井 道子 アレクサンダー大王の神格化について
- 西洋史専攻修士論文
- 石田 恵子 クレイステネスの改革に関する一考察
- 田辺三千広 イヴァン三世の教会政策

通信課程

彙

報

（国史） 定理 英国の対仏戦争（一七九三—一八一五）とその社会・経済的影響について

寺口 一郎 幕末北総地域の農民生活に関する一考察

伊藤 芳子 世阿弥時衆同朋説をめぐって

神戸 元子 多胡碑について一考察

——書誌的にみた読解上の諸問題——

黒田 和子 鎌倉初期に於ける西国在地領主について

——備後国太田庄橋氏を中心として——

森本由美子 熊野詣と九十九王子

角野 晋三 明治維新と坂本竜馬

——船中八策を中心にして——

岸田 詩夫 日蓮の名越居住について

（西洋史） 中村 坦 鎌倉居住当初の経済的援助者

アレー・セーズ・ロゴスに於けるケルソスの思想とキリスト教批判

伊闘みどり ルネッサンスに於ける個人の伸長

——ペトラルカを中心にして——

村越 みち 産業革命とくに木綿工業について

中島 武男 ダンテの神曲に見る宗教的歴史観

小川 明子 フランス革命を通じての農民の地位の変化と役割

佐藤 洋一 イギリス労働党の成立過程とその初期の性格について

恵美須明美 フランス革命に於ける経済的位置

——民衆の動向を中心として——

山岸 極子 ドイツ宗教改革に於ける神学的論争点

——ルター「ハイデルベルク論題」を中心として——

〔東洋史〕

竹里 和子 古代ベトナムに於ける女性の地位

梅本 芳枝 募役法に於ける倉法との相関性について

執筆者（訳者）紹介

金 基元 龍廷 鶴

元 龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基

廷

鶴

基

元

龍

基